

人間の本質的諸特性とその聯關

下 程 勇 吉

一

人間を他の動物より區別せしめる特性は何であるか。人間固有の現象は何であらうか。人間の本質を表はす特性は何であらうか。かく問ふとき、人間固有の現象として人間の本質を示す徴表が古來相當多く列舉せられてゐることを我々は見出すのである。しかしながら哲學的に問題とせられるものは、いふまでもなく、その諸徴表のうち人間自體の本質に關係するものでなくてはならない。ヘーゲルが擧げロツツエが問題にした例を引くならば (Lotze, Logik hrsg. v. G. Misch, S. 52 參照) 耳朶は他の動物になくて人間にのみ固有であるが、このことは——審美的乃至象徵的見地よりの意味賦與の問題としては別とするも——人間自體の本質的特性を問ふ哲學的立場に對しては多くの注意を要求し得ぬであらう。その他、眉毛の存在・血漿の特質・染色體の定數等が人間獨自の現象として若干の生物學者によりて擧げられるとするも、同様に此等は哲學的洞察に直接關係するところは少いと云はねばならない。哲學的乃至人間學的立場より重大なのは、それが何よりも先づ人間の本質的規定に關係してゐる現象であると云ふことである。即ちこゝでは人間の本質的特性を示す諸現象が問題なのである。かく人

間の本質にかゝる諸特性を問題とすることは、同時にその諸現象の間に成立してゐる聯關を取上げることが必然的に含意してゐる。何となれば、それらの諸現象がひとしく人間の本質に關はるものである限り、それらは必然に人間自體の窮極的核心にその焦點を結ぶであらうからである。その限り、人間の本質的特性にかゝる諸現象を問題とする我々の考察は、それらの聯關を問ふ立場を要求し前提するであらう。かく人間の本質的諸特性を問ひその間の聯關を考究することは、哲學的人間學乃至形而上學にとつて一つの根本問題を成すであらう。我々はこの問題について若干の試論を敢てし一つの覺え書としたいと思ふのである。

人間を他の生物より區別する人間固有の現象にして人間の本質を表はすものは何であるか。かゝるものの中、先づ最初に挙げらるべきものは最も包括的にして、基底的なるものでなくてはならない。人間の本質的諸特性を包括する最も基底的なるものは、人間の心身全體を貫いて生きてゐる彈力的全體性一般とも名づくべきものであると云へやう。人間にはその意識面の底を包みその身體生命全體を貫いて彈力的統一性が働いてゐる。かゝる全體的身體的規定こそは、意識・知性・技術・勞働等あらゆる人間の活動作用を基づける現實的基底にほかならない。人間生命は如何なる瞬間にも極めて柔軟なる彈力的全體性に住し、内外の變化に微妙に反應しつゝたえず自らにおいて均衡を保たんとしてゐる。人間のあらゆる器官・組織・機能は如何に微なるものも相依り相制し、たえず變化することに於て自己同一性を維持するのである。人間の身體的生命はあらゆる特殊的變化を包んで自性を保つ動的均衡に成立する彈力的全體性にほかならない。人間に於ては、一定の方向をもつた特定の本能乃至機

能のみが支配的であると云ふことは見られない。即ち人間は無数の可能的方向を宿す彈力的統一態として生れ生きるのである。人間は最も無力な状態に於て生れ出る唯一の高等脊椎動物である。このことは一再ならず指適せられるところであるが、かく無力な状態に於て生れ出る人間の子は、またあらゆる可能的成長方向を宿す柔軟なる彈力性をそなへ、多を未分化のまゝに宿す渾沌の一に止まるのである。かく多を萌芽の状態に於て宿す故に、生物學者が指適する如く、他の動物よりも長期に亙る成長期をもつ點に、人間固有の一特質が見られるのである。無力の状態に於て生れ出る人間の子はうちに無限の開發可能を宿す未分化の一者にほかならない。かかる全體性をふまへてゐる人間は地上唯一の教育的存在である。殆んどその半生を教育に費す人間は、またその生涯をあげて自他より教育せられ得る地上唯一の教育的存在である。此點に人間の大なる本質的性格が見られるのであるが、その基底は多を未分化の相の下に宿す人間の彈力的全體性にほかならない。生れながらにその完成を示す本能乃至特定の感覺が支配的な動物は、特定の領域に於ては人間を凌駕するが、あらゆる可能に對處する柔軟なる彈力性に欠け特殊の環境を超える自由をもつてゐない。かゝる彈力的全體性は如何なる人間にもその如何なる瞬間にも生きはたらくものとして云はゞ本能的である。人體のあらゆる相を貫いて絶えずはたらく、自ら救済し一切の平衡の破綻を調整する代償的傾動が存在すると考へたモナコウは、これを *syneidesis* (*conscience biologique*) と名付けてゐる。(Introduction biologique a l'étude de la neurologie et de la psychopathologie par G. v. Monakow et R. Mourgue p. 84, 71) *syneidesis* はあらゆる本能の調整を實現し絶えず人

間の心身の弾力的平衡を維持する根源的作用である。モナコウはこれをむしろ本能的と見るのであるが、本能が一般に特定の一義的方向をもつものとして他の可能性への方向を欠き伸縮性を欠如するものと考へられる限り、*synthesis* は本能の本能または根源的生命自體とも云ふべく、それは本能固有の特殊的限定に先立つ生命力そのものに近きものを意味すると云ふべきであらう。かくて本能に見られるが如き特定の限定を、超え相互に相補ひ相依る可能的弾力的平衡作用一般こそは、人間の心身の基底をなし人間生命を貫いて生きる全體性である。かゝる弾力的全體性は人間の生命一般を貫く現實的基底としてあらゆる作用の別をこえ更に自他の別をもこえる根源的全體生命に通ずるものである。人間の生命は無限の弾力的フリンヂをもつてゐる。人間のあらゆる作用はかゝる根源的生命力が身體的限定に即して發現するのである。人間においては所謂 *synthesis* が特に優越的に生命の當初よりはたらくと考へられるとき、最初に我々の注意を要求するものとして、人間固有の現象の一つと考へられる「呱呱の聲」をあげることができであらう。

呱呱の聲は人間獨特の現象の一つとして早くより注目せられ、「自然に征服せられた精神の驚き」とも「苦土に生れたことに對する抗議」とも解釋せられてゐるが、それはもとより「解釋」にとゞまることを俟たない。更に同じく解釋の立場に近きものはカントがその「人間學」に説く見解である。「母胎から離脱したばかりの人間の嬰兒は、あらゆる他の動物と異り高い叫び聲と共に出て来る。それはたゞ次のことにもとづくのである。即ち子供は自分の四肢を使用できぬことを強制と解し、自由への要求——これについては如何なる他の動物も表象

をもつてゐなう——を直ちに告げるのひある。」(I. Kants Werke Hrsg. v. E. Cassirer Bd. VIII. S. 159. 尙同書 S. 223 参照) こゝでもカント哲學全體を貫く自由への關心が見られ、かゝる解釋を生むのであらうが、これに對し純然たる科學的説明の立場を採らうとしたのは上述のモノコウである。「嬰兒は啼きながら——と云つてよいだらう——外界との接觸に入るのである。もし嬰兒が生れる際明白な窒息状態でない限り臍帶切斷後深く息を吸ふから、そのため肺氣胞が開かれ、叫び聲が發せられるのである。これは生體の全細胞に感じられた酸素の必要をあらはすものである。」(op. cit. p. 118-p. 119) かくて一方では高度の主觀的解釋を容れるとともに、他方では單に物化學的に説明せられる此の現象は、人間の本質的特性にかゝはるものとして高く評價せられぬであらうが、該現象は少くとも「全く無力な姿で生れ出る」嬰兒に内在する彈力的全體性が外界との均衡の破れを経験する最初の機會に發現する均衡再建的なる *synthetischen* 的作用として把握せられるであらう。

人間固有の一現象たる呱呱の聲を如何に把握するかは今の我々の窮極關心事ではないが、人體生命に於ては自己平衡を志向する柔軟微妙なる彈力的全體性が云はゞ力學的な場として終始はたらいてゐる以上、該現象もそれに深き關係をもつことは推定されるであらう。人體はあらゆる流動と變化とを通じて全體の恒常性を維持する力學的場面である。そこには一義的に内と云はれ外と云はれるものはない。そこには變化を敏感に反映しつつたえず自己平衡を新らしくする動的可塑的生命性が見られるのである。特殊の規定に止まらざる彈力的恒常性の世界を自己の内外にもつことが、人間存在の基底的特色を成すと云はれるであらう。先づ外界の溫度の變化にもかゝ

はらず等温を保つ温血の現象は、必しも人間固有の現象ではないが、かゝる内的恒常性は人間固有の意識作用及び工作作用の精緻性を基づける一因子を成してゐる。内に等温を維持し外に意識的工作的にはたつきかける人間のみが、氣候食物の特殊性より解放せられて赤道より兩極に近き地方までのあらゆる氣候に耐へあらゆる食物を攝取し得るのである。かゝる人間に於ける氣候食物に關する無限定性と聯關して、生物學者は人間の生殖期の無季節性を人間固有の現象としてあげるであらう。内的外的兩面の彈力的恒常性こそは、人間をしてあらゆる生活環境の多様を貫いて統一的生命を維持せしめる所以のものである。他の生物體は一定の方向への本能的固定化に於て成立してゐるが、人體はあらゆる可能性に對する普遍的順應性に住してゐる。他の生物體は特定の環境に對する極度の適應を示すことにおいてその可能的生活圏が局限せられるが故に、多少ともその生活環境に變化を來すときは、新らしき生活環境に對應する自由に欠け無力に陥りしばしば滅亡する。それに反し、人間は特定の本能乃至器官に於ては他の生物に一籌を輸するが、そのあらゆる感覺機能が全體的相互關係の發達を示し境によりて轉ずる彈力的自由をもつが故に、人間はその生活力に於てあらゆる生物を凌駕するのである。即ち動物は特定の感覺又は本能に於て支配的完成を見せるが、人間はあらゆる感能の相互聯關的統一的全體性に於てあらゆる可能的事態に對處し得る自由をもつてゐる。動物はその偏倚的完結性において袋小路に陷る本能に止まるが、人間はその彈力的全體性によつて知能の視野を開き自由に行動するのである。動物は特殊感覺的に限定せられるが、人間はアリストテレスの所謂共通感覺の「中」において存在全體への道を開くのである。生命はどこでも袋小路

に入り込んだが、人間においてのみ自由を見出したと、ベルクソンが語る所以であらう。動物は本能的特殊感覺的定形的であるが、人間は全體的共通感覺的可塑的である。かゝる超特殊的全體的弾力性の故に、人間は赤裸無力の身を以て生れながらよく外界のあらゆる刺激を敏感に感受する「意識」をもち、それに基づけられてあらゆる變化を貫いて自己の内外に恒常的環境を維持樹立する技術的經濟的活動の主體となるのである。人體を貫いて生きる柔軟なる弾力的全體性は、人間固有の意識性と技術性の可能的基底にほかならない。こゝに *homo sapiens*, *homo faber*, *homo oeconomicus* 等は基底付けられるのである。他の動物より人間を區別せしめる人間固有の本質的諸特性は、何等かの意味でひとしく、あらゆる變化に繊細に反應しつゝたえず自性を維持する弾力性をもつて人間全體を貫く基底的全體性に關係してゐるのである。それは多を包む一である。すなはち人間を他の動物より區別せしめる可能的根據は、多を包む一の可塑的弾力性にほかならない。それは可能的に多を含みながら多であると共に一であるとも云はれ、單なる多でないと共に單なる一でもないと云はれるが如きものである。同様にそれは心的であるとも物的であるとも云はれ、その何れでもないと云はれるが如き心身一如的全體統一にほかならない。かく多を可能的に宿す一はそれ自身一として多を超えるものであり、そこには特殊を超える全體性が見られる。以下次第に明かになる如く、人間をして人間たらしむる本質的特性は必ず何らかの意味で超越的全體性に關係するものであるが、かゝる全體性と相互滲透的聯關をなしつゝ——この點の詳論は本稿の範圍外である——人間固有の作用を基づけるものは上述の弾力的全體性にほかならない。人間の心身一如的根柢を成すものは

宇宙全體を貫く彈力的全體性である。人間は内外一貫心身一如的なる彈力的全體性にその生命の根源を負うてゐるのである。かゝる根源に基づけられるが故に、人間はつねに部分に即して全體への視野を開き、本能的定形性を超えて知性の自由に達するが如き個性的存在とも成り得るのである。全體的可塑性の基底に立つが故に、人間は全體を統覺的に把握し「事物の恒常性」を認識する知性人であると共に、自己の生活を技術的に維持する工作人であり、社會的全體性を實踐的に樹立する政治的人間でもあるのである。人間固有の本質的諸特性は常に全體性に關係してゐる。認識における概念的・一般性、技術における工作的恒常性、實踐における人倫的全體性、いづれも知性人・工作人・政治人として人間を他の生物より區別する根據ならぬはない。かゝる人をして人たらしめる全體性を基づけるものは、人間の心身をもつとも原始的に貫く内外一如的なる彈力的全體性にほかならない。人間の心身を最も根源的に貫くものは、多を包んで一に止まる彈力的生命性である。かゝる基底に立つが故に、人間はそれを超えて一般的有意味的超越性に相互滲透的に關はり得るのである。動物は直接的全體に呑み込まれるか、部分に膠着するのみである。むしろ次の如く云ふべきであらう。動物は部分的變化とともに刻々新らしくなる全體の相好に依て全的に支配せられてゐる。そこには部分を超える超越的把握がないが故に、動物は刻々の全體に流され「事物の恒常性」への道をもたない。従つて最も全體に支配せられる動物はその生活に於て最も全體に遠ざかるのである。この點でカツがあげたキルクマンの實驗は我々の見解を直觀化するに役立つであらう。甲の鷗の生んだ卵に乙の鷗が穴をあけると、甲は乙を追ひ拂つてその中味を吸ひはじめると云ふのである。穴一

つが全體の相好を全く變へるのである。その刻々の全體に膠着する動物には、變化を貫いて一なるものを把握する統覺作用は見られない。全體に膠着して自立性をもたぬものは部分を超える全體を把握し得ないのである。動物には部分を超えて全體を把へる超越作用が欠けてゐる。かゝる全體作用こそは人間固有のあらゆる諸特性を貫いて有意味的ならしめるものにほかならない。かくの如き超越的作用を基づける根源的弾力性は人間存在の最基底部まで滲透してゐるのである。人間の根柢を貫いてゐるものは、外的刺激を繊細に受感してそれに自己を委ねることに於いて自己平衡をたえず新らしくする弾力的生命のリズムにほかならない。かゝるリズムは人間生命のあらゆる瞬間を意識的無意識的に貫き滿してゐる。外に出ることによりて内に歸る自己循環性、多を宿す故に一に歸る彈力的統一性、平衡を最も迅速に破ること自體の裡に築かれる自己平衡的彈力性、これらは何れも人間の心身をもつとも根源的に貫く全體的生命のリズムならぬはない。かゝる全體的生命のリズムはつねに全體の有意味性への關はりをもつてゐる。その彈力性こそは人間固有の諸特性の可能的基底を成すものである。かゝる彈力的可能性が身體的限定に即して浮彫りにせられるとき、人間固有の諸現象としての意識・言語・笑・技術等が成立し、更には社會・傳統・歴史等の全體界が超越の光のもとに地上の王國として造立せられるのである。しからば人間の心身の基底に宿る彈力的全體のリズムを展開して人間固有の諸特性を現成せしめる最も直接的なる規定は何であらうか。かゝる規定は最も直接的なると共に、あらゆる人間の本質規定を動機付けるものとしてそれ自身最も人間固有的でなくてはならないであらう。

二

それは——恐らく餘りにもその單純なる規定性の故に人を驚かしめるであらうが——何よりも先づ人間の直立歩行作用である。人間の根源的基底を成す力學的全體性を展開して超越的有意味性への道を開き人間固有の本質的諸特性を發現せしめる原始的規定は、人間に固有なる原始的作用としての直立歩行作用にほかならない。自己運動性をその一般的本質的徵表とする動物の間にあつて、全き意味で直立歩行するものは人間のみである。人間は直立歩行の體制において自己運動をする唯一の高等哺乳動物である。人間は直立歩行性において人間となつたのである。熊も類人猿も直立し得るが、直立し得るのみならず下肢に歩行作用を全面的に託し上肢に體重の負擔なき動物は人間のみである。人間の直立歩行性に關して古生物學者は種々の假設を提出してゐる。その若干をあげて見やう。熱帯林が中部歐洲にまで及んでゐた第三紀において、類人猿は樹上生活をしてゐたが、氷雪期の襲來と共に熱帯林は南退したため、彼等は樹上より草原に下り直立生活をはじめた。このことはジャヴァの *Pithecanthropus* 等から推測せられると或種の論者が主張すれば、人猿同祖説をとる論者(例へば H. F. Osborn 等)は次の如く説くであらう。化石學的に猿類の出現を見たその頃には、すでに人間は直立歩行する動物として存在してゐたので、猿類より人類に所謂進化したのではない、兩者とも始源人 *Dawn man* より生れたのであるが、前者は熱帯の森林に樹上生活をなし器具製作能力を缺き、後者は平地に生活し器具製作能力を具へてゐる云々。

しかし我々にとつてはかゝる進化論的討議は直接の關心事を成すものではない。たゞ猿類に比較するとき、人間固有の直立歩行性が如何に多くの人間の本質的特性を基づけてゐるかと云ふ事態が明かになれば、我々の當面の目的は達せられるのである。以下我々はこのことを次第に明かにするであらう。

人間は直立歩行の運動體制をとるに及んで人として「立ち上つた」のである。直立歩行性は人間に宿る全體性の最も端的にして直接的なる表現にほかならない。全體として神祕的見地に立つ比較象徴學は、制伏する動物と異つて人間が直立して星を仰ぐと云ふ事實に深き象徴的意味を見出さんとしてゐると云はれてゐる。かゝる神智學的見地に對して、實踐倫理的見地より人間の直立性を理解せんとするものに我國においては大國隆正の素朴的な形而上學的見解がある。その「三見三欲昇降圖說」に曰く「人は手と言とありて天地の間に立つものなり。獸は手も言もあらずして天地間に横はれるものなり。」（全集第二卷（三〇三頁））動物の制伏性に對する人間の直立性に着目する此等の兩見解のうち、云うまでもなく我々は——端的なる事實聯關の把握を志さず我々は——後者以上に多くの顧慮を前者に拂ひ得ざるは勿論であるが、それにもかゝらはらず此等の兩見解がひとしく人間の直立歩行性に關して人間に宿る全體的意義に注目せんとしてゐることは認められるであらう。人間に宿る全體性の端的表現が直立歩行性にほかならない。人間は直立歩行するに及んで人たる意味をあらはにするのである。直立歩行せざる人は乳兒・病人・不具者にとゞまり、全き意味の人間ではない。人は直立歩行するとき人として天地の間に立つのである。直立するとき、人は如何なる次元を開くであらうか。

人は直立するに及んで、先づ「眼の世界」を擴大するであらう。ヘルデル以來近くはブルンナー (Dor Mensch in Widerspruch S. 401) などを俟つまでもなく、人間は直立することによりて「より廣き地平圈」を支配する「自由なる見透」に達したのである。他の多くの下級動物に於ては、動物一般の感覺原型たる觸覺乃至嗅覺が支配的である。「動物の魂の大部分は嗅覺的である。」(ヘルデル) 高等脊椎動物になるほど、嗅覺關係的な所謂舊腦は退化し、視覺關係的な新腦部分が發達してゐることを比較解剖學者は指適するであらう。動物が近官又は下級感覺より遠官又は高等感覺の方向に進むとき——換言すれば、觸覺的嗅覺的であることより聽覺的視覺的となる方向に進むとき——動物の神経系全體の遠心的求心的統一は高度化せられ、動物はより高等であると云はれる。人間の直立性はこの動向を飛躍的に高度化し「眼の世界」を基づけるのである。「地面に近きところでは、人間のあらゆる感能は狭い範圍をもつのみである。地面と雜草とをこえるところ、嗅覺はもはや支配しないで、眼が支配する。」(Herder, Ideen zur Philosophie d. Geschichte d. Menschheit, Teil I. Buch 4.) 人が直立するに及んで、人は眼においてより廣き視覺の世界を支配するに至つたのであるか、もとより人間は地上よりの高さに於てはジラフに及ばず、その視力は到底鷲に比すべくもない。かゝる制限にもかゝらず、人間がその存在において優越的となつたのは、人間の視覺が人間そのものを貫く相互聯關的全體生命の「中」に深く通じてゐるためである。匍伏する動物と異りてよくより高き視界の自由に達した人間の眼は、大脳・手その他の身體器官と共に有機的相互聯關的全體統一を構成することにより、人間の優越性を實現するのである。眼は見るとき同時に

考へる作用に結合する。人間の眼は文字を読み象徴を解するのである。感性的形像を見る人間の眼はそれを超えた意味を思惟し理解する脳と共にたらくのである。人間の視覚の發達は大脳の發達と深き關係をもつてゐる。しかも人間の視覚の世界を擴大したものは直立歩行性であつた。その直立歩行性はまた同時に人間の大脳の發達を基づける當のものにほかならないのである。眼の世界を擴大し脳の發達を基づけたものは、共に人間の直立歩行性である。我々が本論文において故意に「基づける」と云ふ現象學的術語を *motivieren* に相近き意味で使用するのは、因果關係でなく、全體的相互聯關性を示さんがためであるが、我々が今人間の直立歩行性をめぐつて編歷をつゞけると、いたるところ人間そのものを貫く相互聯關的全體性に撞着するのである。（未完）